

今日の日を踏みしめて

〔聖書〕 テサロニケの信徒への手紙一 1章 1～10節

パウロ、シルワノ、テモテから、父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会へ。恵みと平和が、あなたがたにあるように。わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところ、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところ、どのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまたどのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

〔序〕 わたしたちが一つとされる場所

おはようございます！ こうして挨拶を交わし合えるのも殆ど二ヵ月ぶりです。やっぱり長く感じましたよね。けれども再びこのように同じ場所で礼拝を捧げられること、本当に嬉しいです。そして改めて思います。私たちがまた「一つとされる」場所は、他のどの場所でもなく「教会」という場所なのだ。私たちはただ「主にあって」結びつけられているのです。そのことは後ほど一緒にあずかる「主の晚餐式」を通して、神様は私たちの心に実感させて下さると思います。

さて、今日から来月にかけて、新約聖書の中の一番古い書と言われている「テサロニケの信徒への手紙一」をご一緒に味わいます。異邦人のための伝道をした使徒パウロの、現在のギリシアですが、そのマケドニア州、テサロニケに誕生したばかりの教会に宛てて書かれた、励ましと慰めの手紙ですが（パウロはこの時南に300キロ程離れたコリントにいます）、これは不思議のように、今の私たち一人ひとりに対してもとても力強く響いてくるものを感じます。そして今日はこの1章の中から特に「信仰と

労苦」「信仰と忍耐」ということにスポットを当てて考えたいと思いました。

[1] 信仰と具体的な労苦(忍耐)

パウロはこの手紙を感謝から始めていますが、何を感謝しているかということ、教会がその信仰を生きているということですね。「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めている」と言っています。—この世界に生まれた教会は、その誕生の初めから「労苦」し、「忍耐」していたのです。

私たちは、神様を信じれば苦しみが無いということはないです。この数ヶ月のことでも、予想だにできなかったコロナ禍の中で、私たちは随分忍耐をさせられたのではないのでしょうか。お仕事の点でも、家庭の具体的な暮らしの点でも、皆それぞれの「忍耐」があったことと思います。そしてそれはまだ続くのですね。これからは「反コロナ」と言うより、「ウイズコロナ」を考えねばならない時に入っているようです。

考えてみると「ソーシャルディスタンス」というのも、パウロが言う具体的な「愛のための労苦」の一つだと思います。特に皆が集まる場で感染拡大を助長しないため何を私はしたらよいか。それを皆で実践して、この社会が、この世界が壊れないために協力をしている。だからこそ私たちは、とても大切な「集まる」礼拝を休止したのです。自分たちのことだけ考えていれば礼拝をした方がいいのです。しかしこのようなこともあるのですね、私たちは祈りの中で、「他者と共に生きる生」が守られて行くために、教会堂での礼拝休止を決断しました。これはとても具体的な事だと思います。私たちの普段の生活は、全く抽象的ではなく、地に足がついた具体的なものです。

パウロはこの手紙で、迫害にさらされ、困難の中を逃げずに生きているテサロニケの教会のために祈り、力づけているのです。

[2] シモーヌ・ヴェイユの言葉から

フランスの哲学者でシモーヌ・ヴェイユという人がいました。彼女は若くして認められた学者でしたが、工場労働者になったのです。そしてその中でこそ具体的な神様の恩寵を感じ、多くの哲学的断片を書いた人です。当時の抑圧的な環境も影響し、1943年に34才で亡くなりましたが、例えばこのようなことを書いています。

「喜びと苦痛とが対立しているのではない。喜び、苦痛、それぞれの中でさまざまな種類のものが対立し合っているのである。地獄のような喜びや苦痛があり、魂を癒す喜びや苦痛があり、天井的な喜びや苦痛がある」。また、こうも書いています。

「注意は、もっとも高度な段階では、祈りと同じものである。そのためには、信仰と愛が必要である。」—この世界や人生に苦しみというものは厳然とあると。しかし、そこでこそ人生を“注意深く”見なさいと言うのですね。人生には悪魔的な喜びというものもあるし、また逆に真に癒しへと導いてくれる苦しみというのもあると言うのです。

また、こういう言葉も残しています。—「キリスト教の何より偉大な点は、苦しみに対

して超自然的な癒しを求めようとせず、むしろ苦しみを超自然的に生かす道を求めているところにある」と。キリスト教の慰めとは、単なる癒しとは異なると言うのですね。

私たちは誰でも試練に出会います。病気、人間関係、その他。それらは私たちに「忍耐」へと導きます。パウロは他の箇所でも「苦難は忍耐を生み出し」と言っています。私は思ったのですが、「忍耐」の反対語は何だろう？と。「短気」と答える人もいます。けれども私は、それは「(自己)放棄」や「諦め」ではないかと思いました。「**忍耐**」というのは、「**自分でそれを受け止めている**」ということでしょう。これは信仰者としてもとても大事なことだと思うのです。「もういいや」となるとその試練もなくなるかもしれないですが、自分自身も捨ててしまうことだと思います。いわゆる「**自爆**」です。

(最近起きた、家族を矢で打って殺してしまった大学生の事件などはひどく悲しい事件ですが、私は、それは忍耐が出来なかった自爆行為のように思えてなりません)。

「忍耐」とは神様が与えて下さった尊い事柄だと思います。先のシモーヌ・ヴェイユの言葉ではよく「**注意する**」ということ。逃げずにそれと向き合う。浅くではなく、深く考えて行くということだと思います。でも人間は、やはりそこから逃げたくなることもあり、極端に言うところの世から去りたくもなります。「**自爆**」ですね。そこで、「今日」という日を忍耐を持って生きていくために必要なもの、それが「希望」なのだ、とパウロはここで言っているのです。—「わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐している」と。「希望」の根拠、源、それは**主イエス・キリスト**にあると。

[3] 私たちが「教会」

私たちの礼拝、実は今後もどうなるのか分からない所があります。そして今、私たちは問われているのだと思います。小さな教会はこれから更に厳しくなる可能性があるでしょう。私たちの川越教会の存続ということも大事だと思いますけれども、たとえ今後、長期にわたってこの場で礼拝が出来なくなったとしても、私が、あなたが、その生活の場所で、その日々を踏みしめながら、主の恵みに支えられてイエス様とつながっていくということ、「希望を持って忍耐」出来るかということが問われていると思います。しかしその中で幸いなのは、私たちは**お互いに祈っている**ということなのです。ある教会員の方がお手紙にひとこと書いて下さったことが私はとても嬉しかったのです。それは、「皆が集まれなくなっても、先生と由紀子さんが教会に繋がっている皆の名前を読んで祈り、礼拝を捧げてくれているということがどんなに嬉しい事であり、力強いことであつたか」と。感謝です。けれども、私たちではないですよ。皆さんそれぞれの場所で礼拝を捧げる時に皆の顔を思い浮かべながら礼拝をされたでしょう。それが、教会です。建物ありきじゃないんです。「**私たち**」が**教会**なのです！

[結] 「死」から解放されているのだから

週報の巻頭言でも書かせて頂きましたが、**中島義道さん**というウィーン大学の哲

学博士が「私たちはコロナの『出口』を待ち望む。しかしコロナが終息しても人間は死ぬのである」と新聞に書いておりました。その通り、人間の根源的な不安は「死」です。けれども、今日の箇所ではパウロは、私たち信仰者の希望の源を書いてくれています。これが決定的です。9節の後半からお読みします。

「あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまたどのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。」

私たちは、根源的な恐れであり不安である「死」からも解放されているのですね。 極端なことを言います。私たちはたとえコロナで死ぬことがあってもいいのです。主イエスの十字架の故に私たちは赦され、「死」は新しい命の始まりとなったのですから！けれども生きての方が更にいいと思います。この「福音」を伝えられるからです。一緒にその恵みに与る喜びを与えられる日々があるからです。教会が与えられている意味はそこにあるのではないのでしょうか。

私たちはイエス様にしっかりと捕えられて生きています。いや、生かされています。生かしている「今日」という日を、地に足をつけて、神様を讃えながら一緒に前進してゆきましょう。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、この世界に「教会」が与えられていることはあなたの奇跡です。私たちは、主イエス・キリストにあって、大きな家族、兄弟姉妹とされています。感謝致します。

「あなた方はこの世では苦難がある。しかし勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている」とイエス様は語って下さいました。そのあなたが、いつも私たちの人生に同伴して下さいことは何と幸いですでしょうか。そして、その歩みは決して孤独なものではありません。「教会」があります。兄弟姉妹が共に祈って歩んでいます。どうぞ、いついかなる時も、聖霊の導きを信じて、十字架と復活の主の恵みに支えられて、この生かされている日々を踏みしめながら一緒に歩む者として下さい。

今日共に礼拝を捧げられましたことを心から感謝して、主の御名によって祈ります。
アーメン。